The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

良忠著作中にみられる「先師」について

沼倉雄人

本研究では良忠の著作中から「先師」の説示を抽出し、『伝通記』を中心に検討・考察を行いたい。なお今回、金沢文庫所蔵の良忠講義録に関しては、整理は行っていない。

一　良忠著作における「先師」

管見の限り、十八の典籍に「先師」という語がみられた。「先師」の語数のみを数えれば、『決答授手印疑問鈔』が四十三箇所ともっとも多く、次いで『伝通記』三十七箇所、『浄土宗要集聴書』二十七箇所と続くが、思想的説示がみられる箇所を数えると『伝通記』が三十五箇所でもっとも多く、『決答授手印疑問鈔』三十三箇所、『浄土宗要集聴書』二十五箇所となる。しかしながらそれぞれの著作の分量を考えると、『決答授手印疑問鈔』『浄土宗要集聴書』において、その説示の割合は大きいといえる。

またその用例も本文の解釈・語註、教学的問題への対応が中心であるが、その行状を伝える説示もみられる。

はじめに

浄土宗三祖然阿良忠の著作は「報夢鈔五十余帖」といわれるほど多く、その論述において引用文献の数・量とも膨大なものである。また文献のみならず、口伝・伝聞も論証として多く用いている。その口伝・伝聞のなかには人物名を記さず、「或云」「一義云」など匿名で示しているものもある。そのようなひとつに「先師云」という表記がみられる。これは単純に良忠の師である聖光を指すものともみられるが、江戸時代の浄土宗の学匠である義山は良遍『念仏往生決心記』の刊行に際してその跋文に「吾が祖・記主禅師、嘗て上人に師事して法相の学を稟受し、浄土の教えを恣詢し、而して『群疑論』に於いて尤も其の要を得たり。故に其の所製の『観経疏記』の中、上人の義を提引するに至りて多く《先師》と称す」（『浄全』一五、五七三頁上）と述べている。このことから一概に「先師＝聖光」とすることはできず、検討の余地がある。

印度學佛教學研究第六十巻第一号　平成二十三年十二月

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

二　『伝通記』にみられる「先師」

本稿では『伝通記』を取り上げ、「先師」について人物の検討を行いたい。

先にも述べたように、『伝通記』においては「先師」の説示箇所は三十五箇所を数える。それらの説示箇所について、聖冏『糅鈔』を一助として『伝通記』にみられる「先師」の特定を行いたい。

聖冏の「先師」の注釈のパターンとして次のようなものがある。

A：「先師」を「鎮西」（＝聖光）と言い換える場合
B：「先師」を特定して聖光以外を示す場合
C：「先師」を言い換えない場合、または触れない場合
D：その他（相伝・師説など）

例えばAの場合、『伝通記』にある左記の文に対し、『糅鈔』は次のように述べている。

『伝通記』

歸命者。下文云。言南無者。即是歸命。亦是發願迴向之義。…中略…香象起信疏云。歸者是趣向義。命謂己身性命。生靈所重莫此爲先。此明論主得不壞信。盡己所尊重之命。歸向三寶請加製述。故云歸命。二歸是敬順義。命謂諸佛教命。此明論主敬奉如來教命傳法利生。故云歸命（已上）。…中略…然今歸命宗無判釋。雖輒難辨。而開題眞言教意。宗鏡佛心宗義。竝非今意。餘師所釋可當今文。先師常存香象後義。（『浄全』二、九一頁下～九二頁上）

『糅鈔』

然諸師釋不似密禪。但是有相。有相歸命相應吾門。故探得宗蹟以當今文。加之鎮西常存香象後義。彼義大趣、似同諸釋。取捨有在。何況、若是記主意樂、非可恠處（云云）。（『浄全』三、一三六頁上）

このような『糅鈔』の説示はほかに十一箇所を数える。

また聖光以外を示すBの例としては以下の説示が挙げられる。

『伝通記』

問。不假自修因。偏依他迴向直有出離義。
答。菩薩慈悲以己善根施他。自成熏發之緣。所謂衆生無始已來則有結緣繫屬。是故他修善根用迴向時。互有恩故他修成於熏發之緣。更發善心修出離行。故非徒迴。況今釋亦云同發菩提心。非是偏依他人迴向可出生死。先師語云。有賢哲云。悟自他一如理之人。以所修善迴向他時。何不成他善耶。先師不爾。自他一如悟前事也。迷情衆生業感各別。何背自業自得之理。他人所修直成自善。但世世流轉有結緣故。有緣者成熏發緣。無緣者無其益也（云云）。予少聞此義。亦同後説（云云）。
故大乘義章九云問。…後略…。（『浄全』二、一一二頁下～一一三頁上）

『糅鈔』

次潤色中○先師語云等者、從此已下至無其益也。擧鎮西物語故先師語者是辨阿上人也。○有賢哲者竹林房法印也。悟謂證悟一如理。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

故次下文示此義。迷悟相對破之。○先師不爾者寶地房法印〔證眞〕。辨阿上人本師故、指證眞名先師也。（『浄全』三、二四〇頁下）

この説示では波線部「先師語云」の「先師」は聖光であるが、傍線部「先師不爾」の「先師」は聖光が比叡山での修学時に師事した宝地房証真であるとしている。

また次の説示では「先師」を澄憲であると釈している。

『伝通記』

請證定竟者。上來聖證名爲請證。依説定判。故名爲定。大師製疏意不聊爾。欲使未來除疑生信。頓超苦海速登彼岸。今之證定意在於茲。

祖師云。諸師製疏未必有證。…中略…〔云云〕。彼等感應未如今證定。

或曰。去貞應三年正月二十五日。比丘尼淨意〔聖覺妹〕爲法然上人第十三周忌辰報恩。書寫淨土依憑經論。於二尊院開題供養。導師聖覺云。先師法印示予云。見聖教時先雖不委。粗見一遍可明義門也〔云云〕。

其次語云。大唐善導依釋迦諸佛指授製觀經疏。是奇異也。而當初雖聞不及尋訪。今親見之。實難思議。（『浄全』二、四三八頁下～四三九頁上）

『糅鈔』

二從聖覺云下至是奇異也、聖覺、擧故法印語兩重語。是澄憲法印事也。（『浄全』三、一〇五〇頁上）

これは聖覚が伝える話の中で示される「先師」であるので、聖覚の師である澄憲が当たることはいうまでもない。

Cの例については一つひとつ検討する余裕がないが、管見の限り十五箇所が該当するとみられる。

Dの例については『伝通記』の「先師」を『糅鈔』では「相伝」もしくは「師説」と言い換えている。この例には五箇所が該当した。

例えば、『伝通記』には三心と菩提心について以下のような問答がみられる。

問。三心菩提心有何差別。

答。大異小同。言大異者。菩提心先他。而方期佛果。三心先自。而正期往生。故約二心之正意者。彼此大異。言小同者。二心俱是大乘心故。

然或人云。若以三心判屬三乘心者。可屬二乘心也〔云云〕。先師翻對便立義云。三心是菩薩心。即是一分菩提心也。意云。專厭自苦。方期灰斷名爲小心。三心不爾。既信佛願。欣大乘土。可屬大心其理分明。彼屬小心其義大誤。

然有遺弟以爲。三心全是菩提心。此亦不然。若存此義亦成大失。所以然者。三心遍通九品。菩提心局在上品。何云全同。

故有遺弟問云。三心菩提心同異如何。

毘沙門堂答云。大異也。大菩提心甚難可發。三心是我等分也。此人聞已即立座去。時法印誦云。聖教抑揚不可一向。此與先師其意同耳。（『浄全』二、八六頁下～八七頁上）

この説示については『東宗要』（『浄全』一一、八二頁下～八三頁上）にほぼ同様の説示がみられ、また『糅鈔』においても、「先師」を特定して示していないものの、同様の内容をもって注

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

釈を施している。このことからここに示される「先師」は聖光であることが推察される。

このほかDの例については、聖冏の理解として「先師」を聖光とみていることが多いため、Dの例に当てはまる『伝通記』の「先師」の説示内容が、聖光の著作中に還元できるかという点を中心に検討作業を試みた。

その結果、判然としないものもあるものの、聖光の著作中に同様の思想が垣間見られ、「先師」を聖光であるとみることができる箇所が見受けられる。

三　まとめ

はじめに述べたように、義山は良遍『念仏往生決心記』の跋文において『観経疏記』に「先師」と称して良遍の義を引くとしていた。今回、良忠の著作中にみられる「先師」を整理し、聖冏『糅鈔』の記述を一助として、とくに『伝通記』における「先師」の説示内容から、その人物について検討した。

その結果、今回検討したなかでは「先師」について、聖光、澄憲、証真が特定された。逆に今回、義山が指摘する良遍の説示であるとうかがわれる箇所は管見の限りみられず、『伝通記』に数えられる三十五箇所のうち、今回検討したほぼ半数以上は聖光の説示であるとみられ、義山が『念仏往生決心記』跋文にいうほど「先師」として良遍の説示は多くないようにおもわれる。

ただし、今回、『糅鈔』において「先師」が「鎮西」と言い換えられている箇所は詳細に考察しておらず、またその注釈において「先師」について触れられていない箇所は今回検討していないため、裏付け・出典調査が必要であり、今後継続して課題としていきたい。

〈キーワード〉　良忠、報夢鈔、『伝通記』、『糅鈔』、師

（大正大学綜合佛教研究所研究生）

NII-Electronic Library Service